# 第４分科会
## 13：30～15：30

# 被災地における子どもや家庭への支援

コーディネーター　加藤　道代氏（東北大学大学院教育学研究科教授･臨床心理士）

パネリスト　工藤　吉則氏（宮城県東部教育事務所指導班副参事（班長）・指導主事）

阿部　結花氏（あしなが育英会東北事務所（石巻担当））

門馬　優氏（特定非営利活動法人TEDIC 代表理事、石巻圏域子ども･若者総合相談センター センター長）

太田　倫子氏（公益社団法人こどもみらい研究所代表理事）

**加藤 道代氏**　皆様こんにちは。東北大学の加藤と申します。第４分科会のコーディネーターを担当させていただきます。本日、たくさんの方々が、子どもたちと家庭、コミュニティーなど、子どもたちの育つ環境を考えていきたいと思われて集まってくださったということが大変うれしく、また、感謝に堪えません。ぜひ、この２時間、皆さんで被災地における子どもや家庭への支援というテーマについて考えていければと思っています。

2011 年３月 11 日の東日本大震災から７年半を超えました。震災から今日まで、東北の被災地では子どもや家庭に対して様々の支援が行われてまいりま

した。未曽有と言われるまでの大災害であり、その被災が広域に及んでいたために、地元の自治体やコミュニティー自体も大きなダメージを受けました。これに対して、震災直後より日本中の皆様から多大な御支援をいただきました。現在も引き続き御支援いただいているところと思います。この場をお借りして、改めて御礼申し上げます。

さて、東日本大震災からこの間、熊本地震も記憶に新しいですが、更に今年に入ってからは大阪の北部地震、西日本豪雨、災害級と言われた猛暑、北海道の胆振東部地震と、非常に大きな自然災害が続いております。その間を縫うような台風、水害、土砂崩れなどを含めますと、日本に住む私たちは常に災害と隣り合わせに生きているのだなと感じます。

東日本大震災後、被災地の子どもや家庭がどのようにこの７年半をたどってきたのかを知るということは、まだまだ息の長い支援活動が求められている東北の被災地の今後を考えるために大変必要なことでもありますが、同時にこれほどに災害の多い日本においては、災害支援に対する見通しと具体的な方法を学ぶということが、極めて重要なことではないかと思います。

今回、子どもの虐待防止推進全国フォーラムにあって、第４分科会は必ずしも虐待ということに焦点化して考えていくわけではございませんが、家庭やコミュニティーが最大の危機に直面化したときに、子どもの日常生活をどう支えていけばよいのかという議論は大変に的を射たものではないかと思います。

それでは、早速、第４分科会のパネリストの方々の御発表にまいりたいと思います。

進行について先に御説明いたしますが、４名のパネリストの方々には、続けて御発表を願います。フロアからの御質問や御意見は、後半にいただくことにいたしますのでどうぞ御協力をお願いいたします。

それでは、最初に東部教育事務所指導主事の工藤吉則さんから、震災後の小・中学校と児童生徒の状況、そしてその支援について御報告いただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

**工藤 吉則氏**　皆さん、こんにちは。宮城県東部教育事務所指導班の工藤吉則と申します。今回このような機会を与えていただきまして、関係の皆様には感謝を申し上げます。

初めに、東部教育事務所と事務所管内の学校などについて、簡単に説明をしたいと思います。

東部教育事務所ですが、宮城県教育委員会の地方機関、出先機関といたしまして県内５か所に設置されている教育事務所の一つでございます。仙台市を除きます。場所は石巻市にある石巻合同庁舎内にございます。昨年度まで県北の登米市にも教育事務所があったのですが、この４月に２つの事務所が統合されまして、東部教育事務所として再編成しております。管内の市町は、石巻市、登米市、東松島市、女川町の３市１町となっております。地図でお分かりのように宮城県の東北部、沿岸部に位置しております。

所内の組織ですが、４つの部署、班に分かれております。私が所属する班は指導班と申します。

主な仕事ですが、学校教育の指導・助言や、学校の先生方の研修、学校保健及び学校給食、そして生徒指導などを含めた教育相談などです。例えば管内の公立の幼稚園、小学校、中学校を訪問して授業などを見て助言したり、研修会を開催して先生方の資質の向上、学校の課題解決などを支援したりする仕事をしております。現在指導主事が10名、相談業務等を行う専門のカウンセラーが３名、在学青少年育成員という者がいるのですが２名配属されております。

所の組織の中に「児童生徒の心のサポート班」という部署もあります。今回、指導班の取組とともに、このサポート班の取組についてもお話をしたいと思います。

まず、東部管内の小・中学校について簡単にお話をしたいと思います。資料が少ないことを御了承いただきたいと思います。30年度の管内の学校数ですが、小学校が64校、中学校が33校の計97校です。児童生徒数は２万名弱ということになっています。2011年の震災前から児童生徒数は減る傾向にあったのですが、震災後学校の統廃合等が更に進むことにより減少しているという状況にあります。

今回、被災地における子どもや家庭の支援ということで、甚大な津波被害のあった管内石巻地区、市

町名ですと、石巻市、東松島市、女川町を中心に取り上げてお話をしたいと思います。

石巻地区の沿岸部の学校では、東日本大震災の津波により甚大な被害を受けた学校が多くございます。例えば、石巻市で被災した学校施設は小・中学校合わせて14校。東松島市ですと小・中学校合わせて６校となっております。ここにあるように27校あったのですが、統合等を加えまして、今15校に減っています。もちろん、このほかにも学校はありますが、このような状況になっています。校舎の被害や児童生徒の減少等によりこの７年間、また今後も統廃合が進んでいくということが言える状況です。

今回のテーマは被災地における子どもや家庭への支援ですが、私たち指導班、所属専門カウンセラーを除きますと、学校の子どもたちや家庭と直接関わることはなく、県教育委員会の出先機関として各市町の教育委員会さんを通して、各学校や先生方を支援する立場で仕事を行っています。

その中で、被災地である管内の学校の子どもたちの健全育成に向けて、どのように学校や先生方を支援していくことができるかということが大きな課題です。それぞれの学校には、課題は様々ありますが、今回はその中から児童生徒の不登校の問題について取り上げたいと思います。

不登校の状況を見る場合、不登校在籍者率、出現率というのですが、それで見る場合があります。学校在籍者100人当たり何人不登校がいるのかという数字です。資料では、平成28年度の調査ですが、小学校で全国が0.47％に対し、宮城県が0.52％と高く、宮城県内でも東部管内では0.74％とさらに高くなっています。中学校においても全国が3.01％に対し宮城県が4.08％。さらに東部管内が5.00％となっています。

先週、今年度の結果が出ており、宮城県、全国ともこの下の表に経年変化があるのですが、年々増えているという状況になっています。

不登校の原因には、様々あります。県の調査によると、不安、無気力、学校における人間関係、遊び・非行、理由がはっきりしないなどがあります。これらは、小・中学校、学校種でも違いますし、また学年でも違います。複数の要因が関わっている場合が多くあります。

また、この不登校の問題は震災とどのような関係があるか。これについては、県教育委員会では震災の影響はいまだあると捉えております。

下の⑶ですが、県の教育委員会で行っている長期欠席状況調査結果、28年度なのですが、この調査で不登校のきっかけと震災の影響について、「ある」と回答した学校の割合の結果が出ています。「ある」と答えた学校の割合ですが、宮城県全体で小学校が3.8％。この数字ですが、実は25年度の調査では8.7％でした。年々減少していると言うことができます。

ただ、石巻地区の結果を見ると、県内の結果より高く5.8％となっています。中学校でも宮城県が2.9％に対し、管内では8.3％と高くなっています。

管内の学校では不登校のきっかけとしての震災の影響が大きいと考えている学校の割合は、多いと言えます。

このような状況の中で、教育事務所として不登校の問題、特に震災の影響がいまだ残る不登校の問題に対して、どのような取組を行っているか、これから紹介いたします。

一つ目は、「学校や教員への支援」についてです。

初めに申し上げましたように、私たち指導班では指導主事が各市町の教育委員会の要請に応じて年数回学校を訪問しています。主に授業等への助言を行っているのですが、そのプログラムの中で「いじめ・不登校を生まない学級・学校づくり及び学校課題に係る話合い」をその学校の先生方を集めて実施しています。「いじめ」、「不登校」、「学校課題」、これらの中からテーマを学校ごとに選んでいただき、ワークショップ型の熟議参加型の話合いを通して内容を深めていただいております。

この話合いを通しまして、例えば不登校であれば先生方に正しい認識、対応の仕方について学んでもらい、先生方の資質、力量などを高めるということを目的としています。

この話合いは平成25年度から仙台市を除く県内の公立小・中学校全てで実は行われています。その中で、テーマは各学校に決めてもらうのですが、管内の学校においてはやはり不登校の問題に関わるテーマを設定する学校が多くなっています。またテーマの多くは、不登校の未然防止で、今学校に来ている子が不登校にならないようにするにはどうするかとか、そういう問題が多く話し合われ、不登校を生まない学級、学校づくりに向けて熱心な話合い

が行われているという状況です。

次に、二つ目として「登校支援ネットワーク事業」についてお話をいたします。

この事業は、県教育委員会が県全体で行っている事業ですが、ここにあるように心のケア事業、志教育関連事業など様々ですが、その中の心のケア関連事業の中で登校支援ネットワーク事業が位置付けられています。

その取組について説明しますと、一つは不登校児童のいる学校の取組を支援するということです。もう一つは、学校、家庭、関係機関と連携したネットワークを作り、学校復帰に向けた多様な支援を行っていくことです。これらが登校支援ネットワーク事業の目的です。

主な事業内容としては、資料に５点掲げておりますが、今回この中から訪問指導員の派遣と不登校児童生徒の保護者等を対象とした教育相談を取り上げたいと思います。

まず、訪問指導員の派遣についてです。不登校児童、別室登校、学校に来ても教室に入らず別室にいる児童生徒、また登校しぶりの児童生徒も含むのですが、その児童生徒と保護者を対象にして訪問指導員、これは学校の教員以外の方々ですが、教職経験者、スクールカウンセラーの経験をしている方々など、その方たちにお願いをいたしまして、直接家庭や学校を訪問して個別相談や学習支援を行っているという事業です。

具体的な例を申しますと、家庭訪問を実施し算数などの学習支援、また、子どもたちと折り紙やゲームなどをしたり、家族や友達のことを話したりしながら生活相談をするなどということを行っています。ただ、家庭訪問をしても本人に会えなかったりすることもあるということです。資料の下の表にありますように、この３年間、訪問指導員の要請は年々増えています。この３年間で指導員の数を増やすことで学校の要請する支援の訪問回数も増えているという状況になっております。

もう一つが、「不登校児童生徒の保護者等を対象とした教育相談」の実施です。

これは、不登校及び不登校傾向の児童生徒さん方がいる保護者や家族の方に集まっていただいて、その改善や解消に向けて事務所のカウンセラーや担当者が情報を交換し合ったり、お話をしたりする場を設けるということです。

内容といたしましては年２回、石巻地区、あと登米市の登米地区と２か所に分かれて話合いの場を設定しております。

次に、「みやぎ子どもの心のケアハウス」の運営事業です。

この名前を聞いたことのある方は多いと思いますが、震災等の影響が考えられるいじめや不登校、学校生活に困難を抱えるようになった子どもたちの学校復帰及び自立支援の取組を援助することを行っています。

本年度は 19 市町で設定する予定です。宮城県が運営を支援しています。管内石巻地区、登米地区合わせて全ての市町でこのケアハウスが設置されています。ケアハウスにはスーパーバイザーや心のケアコーディネーター、学びコーディネーターなど様々な人材が派遣されています。

資料にありますように、例として心のサポート、適応サポート、そして学びサポートと、この３つを備えて事業を行っています。このほかにも家に引きこもっている児童生徒がいる場合には家庭訪問を行ったり、児童生徒と悩みや日常の出来事などを話し合ったりしているという状況です。

昨年度の不登校児童生徒の再登校率ですが、宮城県の小学校の場合は 40.3％、中学校で 32.3％というように、一度不登校になっても学校に再登校する割合は、宮城県では実は全国よりも高くなっています。特に、この子どもの心のケアハウスに通所している児童生徒が再登校になった割合は高くなっているという状況が出ています。本県においても今後、子どもの心のケアハウス事業は、さらに充実していきたいと考えていきます。

これまでは、指導班の主な取組をお話ししましたが、最後に「児童生徒の心のサポート班」についてお話をします。

震災後、心のケアの必要性が増して、いじめや不登校も複雑多様化する中、やはり学校だけでは対応が難しい事案が増えております。そこで、学校を外から支える仕組みとして平成 28 年４月に被災沿岸部のほぼ中央にある石巻市を拠点と考え、「児童生徒の心のサポート班」を県内で初めて東部教育事務所内に設定しました。今年度は県南の大河原教育事務所というところがあるのですが、そちらにも設定

し、県内２か所のサポート班ということで取り組んでおります。

主な業務内容ですが、サポート班は様々な相談内容に幅広く対応できるよう心理職、教育職、福祉職の３職種で構成されて、学校や家庭に訪問できるアウトリーチ機能を持っていることが特徴として挙げられます。なかなか学校で対応できないところを専門の職種の方々を置くことによってアウトリーチ機能を高めていくというものです。３職種でワンストップ的支援に対応しているということでございます。

この２年間の活動状況を、資料にありますとおり地域別に見ると、やはり被災沿岸部の東部、石巻地区ですね、あと気仙沼からの相談が全体の４分の３を占めている状況です。

校種別では、小・中学校が４割ずつ。相談職種別としてはやはり不登校相談が大きな割合を占めております。

このサポート班ですが、ケース対応については、被災により転居や転校を余儀なくされ、生活環境が大きく変化したこと、生活基盤が不安定なため慢性的な不安を抱えている子、本来側にいるべき大人が様々な対応に追われ、関わりが不足している子など、様々な不登校をはじめとする問題行動が垣間見られます。サポート班としては、３職種でアセスメントを大切にしながら安心を増やす関わりを心掛けている状況です。

資料にはございませんが今後の課題等をまとめてみました。被災からの復興状況。被災の影響が様々いまだにあるという現状を踏まえながら、さらに関係機関の皆様方と連携を深めながら県の各事業、本事務所の事業の充実を図っていきたいと思います。

また、所内においては指導班、今説明しました「児童生徒の心のサポート班」との連携を図って、さらに学校、先生方に積極的な支援を図りたいと思います。

また、登校支援ネットワークによる不登校に関わる児童生徒、その保護者への支援等も積極的に関わりながら改善を図っていきたいと思います。

以上、早口で分かりにくい点あったことと思います。その点は、御了承いただきたいと思います。以上、私からの説明を終わります。御清聴ありがとうございました。

**加藤氏**　震災被害を受けた地域に起こっている児童生徒たちの問題に対して、直接児童生徒たち、保護者、学校を支えること、学校と独立して外からの組織全体を見ていくことといった多層な支援という点から御報告いただきました。ありがとうございました。

それでは、次のパネリスト、あしなが育英会の阿部結花さん、お願いいたします。阿部さんは、東日本大震災で親を亡くした子どもたちとその保護者を対象とした支援活動について御報告いただきます。お願いいたします。

**阿部 結花氏**　皆さん、こんにちは。あしなが育英会東北事務所から参りました石巻担当の阿部結花と申します。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

まず初めに、当会について簡単に説明をさせていただきます。あしなが育英会とは、病気、災害、自死などによって親を亡くした子どもたちを奨学金と心のケアの物資両面でサポートをする民間団体です。奨学金のほうでは東京に本部を置き、1988 年以降、約４万 2,000 人に貸与してきました。心のケアのほうでは、1999 年に起こった阪神淡路大震災をきっかけに兵庫県神戸市に遺児の心のケアセンター神戸レインボーハウスを開設しました。現在では、神戸のほか東京、仙台、石巻、陸前高田の５か所にレインボーハウスを開設し、現在活動を行っております。

本日は被災地における子どもや家族への支援ということですので、当会全体のケア活動と、あとは石巻レインボーハウスでの活動を御紹介します。

まず、基本的な知識として当会が把握している東日本大震災遺児は 2,083 名です。このグラフは当時の年齢を表したものですが、小学生から中学生が約５割。高校生が約 2.4 割。就学前が約 1.3 割でした。当時、お母さんのお腹の中にいた子どもたちも今年小学１年生になりました。また、震災で父親を亡くし、母子世帯になった遺児が約５割。母親を亡くし、父子家庭になった遺児が約 3.5 割。両親もしくは震災前に片親で残った親を亡くした遺児が約 1.5 割となっています。

震災以降、東北での活動としましては特別一時金制度を設け、申請のあった2,083人に一人当たり282万円を給付しました。スライドのほうが2,082人になっていますが、正しくは2,083名です。申し訳ありません。

また、2011年５月より石巻市内の学校や教室をお借りして子どもたちが体を動かして遊んだり、家族のことや自分自身のことをお話ししたりするワンデイプログラムという活動を行ってきました。こちらのプログラムは、現在も継続的に行い、長期休みや季節行事に合わせてお泊まり会も行っています。

ほかにもレインボーハウス建設のための募金活動や、遠方にお住まいの遺児家庭、SOSのあった御家庭への家庭訪問、調査活動、他団体や企業の方々と連携した活動なども行ってきました。現在では、こういったことのほか、もっと地域の方々にレインボーハウスを身近に感じていただけるように、私たちのプログラムがお休みの時に限りますが、レインボーハウスの貸出しを行っております。

子育て支援や子ども支援をされている団体さんの研修や、石巻地区の養護教諭の先生方の自主勉強会のほか、ママ友サークルなど様々な方に御利用いただき、少しずつではありますが、レインボーハウスを地域の皆さんに知っていただけるようになってきたかなと思っております。

先ほどお話ししたワンデイプログラムなど、レインボーハウスで過ごしている様子についてお話をさせていただきます。

こちらが、石巻市中里にあります石巻レインボーハウスです。震災以降、本当にたくさんの方々に御寄附をいただき、2014年に開設し、今年で４年目になります。

レインボーハウスには、子どもにも大人にも共通する７つのルールがあります。例えば、人や自分の体を傷つけない。人や自分の心を傷つけない。ストップと言われたらやめる、止まる、などです。

ワンデイプログラムの中では、亡くなった人についてのお話や自分自身のお話をする時間があります。その際には、話せないことはパスできる、人のことはよそでは話さない、秘密だよ、というルールを設けています。やはりどうしても隣に座っている子が話し始めると、「自分も話さなきゃいけないのかな、本当は今日は話したくないんだけどな」という子ももちろんいます。そういった子が無理に話をしたりしないように、しなくてもいいように、その子自身のペースを守るようにこうしたルールを設けています。また、一生懸命それぞれが話をしているので、レインボーハウスで聞いたことはここだけの話にしようねという約束をしています。このようなルールの中で過ごし、子どもも大人も自分も大事、相手も大事にして、そこに集うみんなで安心、安全な環境づくりを行っています。

これまでの活動を踏まえて今後気がかりなことは、子どもについては大きく２点あります。

まず、一つ目は「覚えていない」世代への気持ちの寄り添いです。現在レインボーハウスに来ている子どもたちは小学２年生から６年生の子が多いです。当時０歳から４歳くらいの子どもたちです。当時０歳の子は当然震災の記憶も、亡くなった大切な人についても覚えていません。３歳、４歳だった子たちもかすかに記憶がある程度です。家にお父さんやお母さんがいないことが当たり前に育ってきた子どもたちが、学校に行くようになって、何やらほかの家庭とはちょっと違う、何でうちの家にはお父さんがいないのだろう、お母さんがいないのだろうということに気が付いたり、ほかのお友達の家族の話を聞いて、ああ、お母さんがいたらいいな、こういうときお父さんがいてくれたらいいなと思いをはせたりしています。

また、兄弟の中でもお兄ちゃんはお父さんと遊んだ記憶があるけれども、僕はお父さんのこと全然覚えていない。家族の中でお父さんの話が出ると、僕だけ仲間に入れない。そういった戸惑いや寂しさ、ときには怒りといったどうしようもない気持ちのやり場に困り、心が揺れているケースもあります。そういった子どもたちのサポートを今後どうしていったらいいのかということが課題です。

二つ目は、後ろ髪を引かれる子どもと孫の気持ちへの寄り添いです。高校まで地元で過ごし、次の進路を考えるときに親に心配を掛けたくないという思いが当然先に出てきます。また、育ててくれた保護者が祖父母であるなど高齢な場合は、今からでもいずれでも自分が面倒を見なければならないと考え、本当は地元を離れて仙台や東京のほうの大学や専門学校へ進学したいけれど、金銭的な面で我慢をしたり、離れることができないなど進路選択の幅が狭く

なったりしてしまっています。

続いて、保護者のグループについてです。祖父母の方々の孫育てが気掛かりなことです。60代から80代の祖父母の方々が一生懸命第二の子育てをされています。常に、いつまで健康で育てられるのか心配しています。また、親がいないからと思われないように、孫に様々な習い事をさせるなど、御本人自身も様々なプレッシャーを感じられています。ほかにも、思春期の時期に入った子どもとの関わりや異性の子どもとの関わり方について、保護者の皆さんの悩みは尽きません。御自身も大切な人を亡くし、つらい思いや様々な思いを抱えながらも日々懸命に子育てや孫育てをされています。

子どものケアを目的にこの活動自体始まりましたが、保護者は子どもが育つ環境です。子どもにとって一番身近な保護者の方々の肩の力が少しでも緩み、よりよい家庭、親子の時間を過ごせるようこれからどういったサポートが必要か、引き続きこちらも課題となっています。

課題もたくさんありますが、７年半の積み重ねを通して少しずつ見えてきたものもあります。子どものほうでは長い年月を共に過ごし、子どもたち同士が本当に兄弟のような関係になっています。今レインボーハウスに来ている子たちは、ひとりっ子が多いですけれども、レインボーハウスに集まることで、様々な年代の仲間と一緒に過ごしています。小さい子たちはお兄ちゃん、お姉ちゃんをモデルに成長していますし、逆に大きい子たちは自然と小さい子の面倒を見てくれるようになってきています。

また、遊んでいる最中でも亡くなった人について自然と話をすることもでき、同じ境遇の者同士のピアサポートが成り立ってきているように思います。

また、幼少期に来館していた社会人や学生の子たちにとっては、レインボーハウスが「帰る場所」になりつつあります。特に、３月11日は上京先から帰省して家族でお墓参りなどの用事を済ませた後に来館し、子どもたちや職員と再会を喜んだり、近況を報告し合ったりして、またそれぞれの生きる場所へ帰っていきます。そして、自分たちがしてもらったことを次の世代へ、自分よりも小さな子どもたちのために何かしてあげたいという気持ちから、私たちの仲間としてボランティア研修を受けて、一緒に活動する子たちも年々増えてきました。

保護者のほうでは、大切な人を亡くし、見えない不安の中で一人、子育てをされている方々がレインボーハウスへ集まっています。共に過ごす時間を通して、一人では抱えなくてもいいという安心を感じていただいているように思います。年齢や立場など関係なく、お互いに情報交換をし合ったり、心の内を話したりして、その雰囲気が親戚の集まりのような優しい時間となっています。

そして最後に、私たちの活動にボランティアの方々の存在は欠かせません。継続的な関わりや寄り添いを通して、一緒に子どもたちの成長や変化を見守る仲間として本当に日々助けていただいています。子どもたちが話をしたいとき、遊びたいとき、そっとそばにいてくれる、もう存在自体が彼らの生きるサポートになっていると思います。

私たちスタッフだけでは十分なサポートを遺児家庭の皆さんにすることはできません。しかし、地域の方々やボランティアで来てくださる方々と一緒に、これからも活動を続けていきたいと思っております。

以上になります。御清聴ありがとうございました。

**加藤氏**　あしなが育英会の阿部結花さんからの御報告でした。かけがえのない大事な人を亡くすという多大な喪失体験の中で、子どもたちにいつも変わらず安心して過ごせる、そういう温かな関わりを提供することを目指してこられた。その中には、自分を大事にする、そして相手も大事にするというメッセージが強くあるということを感じさせていただきました。ありがとうございました。

それでは、３番目のパネリストになります。NPO法人TEDICの門馬さんです。子どもや若者の生きづらさの全てに目を向けて、まさに総合的な支援を行っていらっしゃいます。それでは、どうぞよろしくお願いいたします。

**門馬 優氏**　皆さん、こんにちは。特定非営利活動法人TEDICの門馬と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

今日は、15分ほどお時間をいただいております。虐待防止というのは、一部の専門職、関係機関、

支援団体によって成し遂げられるものではなくて、まさに今日会場にいらっしゃる皆さんと共に考えていきながら成し遂げていく、そういったものだと私は思っております。

改めまして、門馬と申します。私自身の地元は宮城県石巻市でございます。石巻市にさんずいに奏でるという字を書いて湊と読む地名がありますが、その出身でございます。読んで字のごとく本当に海の近くでしたので、津波にまさに飲み込まれてしまった、そういった地域です。自分の地元が被災をしたことをきっかけに避難所にいる子どもたちのために何かできることはないかと立上げをしたのが、今の団体です。

現在、法人の中では代表理事という立場でありますが、併任という形で石巻圏域子ども・若者総合相談センターのセンター長を務めております。主に困難ケースのアウトリーチを中心に対人援助にあたっている現場の支援者でもあります。

主に活動している地域は石巻市・東松島市・女川町の２市１町となっています。

支援の主な対象が、子ども・若者という点が大きな特徴になるかと思います。私たちは、例えば子どもが学齢期でいる間までしか関わることができないという枠を取っ払い、具体的に申し上げますと、０歳から39歳の子ども・若者、そして家族を支えていくという団体でございます。会場の多くの方が、既にいずれかの支援機関などで対人援助に当たっているということでした。直面されているケースの中でも、困難なケースというのは、短期的な期間で解決に至るというケースではないと思います。学齢期の間で状況が好転したとしても、その後でもう一度支援が必要になってくる、そのようなケースもあるのではないかと思っています。そこに切れ目を作らず、長期にわたって支えていこうという点が、法人の大きな特徴であるかと思います。

法人のスタッフは、今年度からは、精神保健福祉士、社会福祉士、教員免許保持者、キャリアコンサルタントなど特に多職種というところを中心に力を入れています。

法人の事業の変遷について説明いたします。

当時は被災した子どもたちを何とか支えたいという思いで避難所での学習支援を始めていったわけです。被災した子たちを何とか支えたいと支援を続けていった、その取組の中で、被災した子どもたちはたくさんいるけれども、被災してなかったとしてもしんどい思いをしている子たちが地域にはいるということに活動を通じて気付き、であれば被災した子どもたちが生活をしている避難所だけではなく、地域の中に活動の場を広げていこうという方向になっていきました。

地域に開かれた公民館、あるいは地域のフリースペースを借りながら活動を広げると、また気付きがありました。そもそも、この場所に来ることができない状況にいる子たちは、より深刻な状況にあるのだということです。であれば、家庭の状況によらず、本人の意思でアクセスできるようにと下校するまでの時間に、学校内で難しい状況にいる子どもたちに関わることができないかということで、学校と連携しての学習支援を始めていきました。

ここでまた気付きを得ました。学校に来られてない子どもたちは、どのように支えられるのか。そこで、今度は学校に通うことができない子どもたち、いわゆる不登校の子どもたちを対象にしたフリースクールの取組「ほっとスペース石巻」を始めていきました。

フリースクールの取組を始めると、また気付きを得ました。フリースクールを開いたとしても、そもそも家を出ること、部屋を出ることすら難しい。そのような親御さん、関係機関の皆さんのお話をたくさん聞くにつれて、来ることができないのであれば、私たちが訪問できないかと考え、アウトリーチ、訪問型支援に展開をしていきます。

そして、問題の本質に、核心に迫っていくわけです。なぜこの子たちがこんな思いを抱えながら、この年齢まで生きてきたのか、生きてくることができたのか、生きなければいけなかったのか。そこを紐解いていくプロセスで見えてきたのは、これは子どもたちに何かの問題があるわけではない。苦しさ、辛さ、憤り、諦め感、悲しみ、そのような様々な感情を抱えざるを得ない状況が、子ども・若者だけではなくて、御家族の中にも、あるいは御親戚の中にも、あるいは地域の中にもあって、それが複雑に絡み合っていく中で、彼らの置かれる状況が生まれているということです。子どもたちに直接関わるだけで解決できるというわけではなく、家庭全体を支えていく、そのような取組をしていかなければいけな

いだろうということで、今年度から開設をしている石巻圏域子ども・若者総合相談センター、またセンターを基点とした個別伴走支援の取組となります。

子ども･若者育成支援推進法という法律に基づき、設置をされた石巻圏域子ども若者支援地域協議会の指定支援機関という立ち位置になっております。この通称「子若法」と呼ばれる法律は、教育、福祉、医療などといった様々な分野を横断し、分野の縦割りを超えて、困難を抱えている子ども・若者を持続的に、協働的に支えていく、そうしたことを推進するための法律でございます。指定支援機関ということで、協議会を構成する関係機関とは法に基づき、必要に応じて支援に必要なケースに関わる情報を共有しながら支援をすることができます。宮城県ではこの石巻圏域が初めての取組となっています。

「震災がきて、救われた」という言葉です。2011年８月､夏の避難所で僕はこの言葉に出会いました。８月の避難所で生活を余儀なくされているということは、もう自宅に戻れる状況ではないわけです。そういった状況であるにも関わらず､「震災がきて、救われた」と言うのです。当時中学３年生の男の子でした。彼は、震災以前から不登校だったという話をしてくれました。その後、父親がリストラに遭い失業。心がぽきっと折れてしまった父親は、再就職することができない。アルコールに逃げ込み、依存症となっていく。アルコール依存となった父親は、母親に暴力をふるうようになり、母親は鬱に追い込まれていく。姉は非行に走っていってしまうと、こういった状況になっていたのです。これが震災の前にあったということなのです。震災の前の彼は家に引きこもる状況の中で､なんとか耐え忍ぶしかなく、誰かに「助けて」の声も上げることもできずにいました。そんな彼がこの震災によって、避難所という地域に放り出されることになったわけです。

避難所というのは、まさに地域にあります。地域の良いところでもあり難しいところは、地域のつながりがあるところ。裏を返せば地域のしがらみがあるところです。地域のネットワークシステムって本当にすごいなと思っています。それがつながりとして機能すれば強固なセーフティーネットになるかもしれません。しかし、それがしがらみとして機能すると途端に「助けて」という声が上げづらくなるのです。

そんな地域にある避難所で彼は生活することを余儀なくされました。この男の子の家の状況は地域の方々は、皆さん分かっていたはずです。何とかしなきゃいけないと思っている方もいらっしゃった。一方で、どう関わっていいのか分からないという方もいらっしゃった。関わるにはなかなか微妙な距離があった。そこを飛び越えていったのが県外から来て下さった青年でした。地域のバックグラウンドが分からない、ある意味利害関係のない方でした。地域の方が、どう声をかけたら良いかと悩んでいたところを、ぱっと飛び越えて「君、何年生？」のような形で声を掛けたわけです。「震災がきて、救われた」と発した彼は､避難所に放り出されたことによって、この青年に声を掛けてもらうことができた。この青年は、彼が置かれる状況を聞くわけでもなく、ああでもないこうでもないと言いながら､漫画やアニメ、たあいもない話をしてくれたそうです。声を上げられずにいたけれども、震災があったおかげで人とつながることができて、自分のことを受け止めてくれる誰かに出会うことができて、だから自分は救われたのだと。そういう話を彼はしてくれたということなのです。

一方で、これは、東日本大震災が気付かせてくれた大きな課題だと思っています。あれだけの方の命の犠牲があってもなお､「震災があってよかった、救われた」、そういった思いを子どもたちに言わせてしまっているという状況です。

東日本大震災発災から時が経つにつれ、また「助けて」という声を上げにくくなっているかもしれません。我々、大人がどうやって向き合うのか、それがまさに問われているのだと思っています。

どんな境遇の子ども、若者であっても、どんな状況に置かれたとしても、自分で、自分の人生を生きられる、そういった地域でありたいと強く思っております。

最後に､支援の全体像をお話ししたいと思います。私たちが運営をしている石巻圏域子ども・若者総合相談センターには､様々なケースの相談があります。相談ケースの多くが不登校に関する相談。そして、相談の多くを占めるのが御家族、もしくは学校や病院等の関係機関です。このように様々なところからの相談をワンストップで受け止め、情報をアセスメントし、必要な社会資源につないでいく、または複

合的な困難を抱えるケースであれば、指定支援機関として、支援のコーディネート、ケースマネジメントを行い、必要な関係機関と一緒になりながら、アウトリーチも含めて、個別伴走型の支援に取り組んでいきます。

そのほかにも、主にネグレクト等の状況におかれる子どもたちと一緒に夜の時間を過ごすプログラムや、不登校の子どもたちが利用するフリースクール、家庭教師のように直接、子ども・若者のもとへ訪問していく活動も行っています。詳しい部分はディスカッション等で補えたらと思っております。

以上になります。御清聴ありがとうございました。

**加藤氏**　ありがとうございました。子どもが子どもとして、若者が若者として普通に生きていくことのお手伝いは何でもやります、という柔らかさを感じるとともに、そのお手伝いがこれほど活躍しなければならない社会や現代という問題を考えずにはいられませんでした。

さて、それでは最後になります。４番目のパネリスト、こどもみらい研究所の太田倫子さんを御紹介いたします。本日、この場は、大人たちが集まって子どもたちのことを考えている場ではあるのですが、実は当事者の子どもがいないなと思います。これから御紹介いたします太田さんは当事者としての子どもの存在を尊重して、その表現を育てていく場をつくりたいという思いで活動をしていらっしゃいます。どうぞお願いします。

**太田 倫子氏**　皆さん、こんにちは。ただいま御紹介いただきましたこどもみらい研究所の太田と申します。今日は活動の紹介の機会を頂戴し、大変光栄に存じます。ありがとうございます。

私どもこどもみらい研究所は、石巻日日こども新聞という新聞を発行しています。小学生から高校生までの子どもたちが取材をして作る新聞です。2012年の３月11日と言えば皆さんお分かりになると思いますが、東日本大震災からちょうど１年目の日に創刊しました。以降、３か月後の６月、９月、12月、そして３月と、月命日である11日を発行日として、毎年必ず３月11日が発行日になるようにしてきました。現在までに第27号までを発行しました。今日、皆様の資料の一つとしてお配りしたものが、先月９月11日に発行されました第27号です。

今日は、どうしてこの新聞をつくり始めたか、どんなことを目指しているか、そしてどんな気付きがあり課題があると感じているかについて、皆さんに共有させていただきたいと思います。

その前にちょっと自己紹介なのですが、私は石巻市で生まれまして、高校を卒業するまでの18年間、石巻で育ちました。石巻は田舎でつまらないと思っていまして、早く石巻から出たいとずっと思っていました。当時石巻には大学がありませんでしたので、進学の段になって私は東京の大学に進学をし、東京で就職し、恐らく石巻には戻ってこないだろうと思っていました。ところがですね、30代を過ぎた頃からあることに気が付き始めるのですが、仕事で国内外のいろいろなところに出かけたり海外で生活をしたりという機会もあったのですけれども、どこに行ってもいつの間にか石巻と比較をしているのです。例えば石巻の魚はおいしかった、石巻にはこんな美しいところがあったなど。石巻は田舎でつまらないと思っていたはずなのですが、石巻のいいところばっかりを思い出しているのです。そうこうしているうちに東京での仕事のスピードや生活のスピードにだんだん疲れてきたところもありまして、故郷のために何か仕事ができるようになったらいいなという思いもありまして、40代に入ってから宮城県に戻ってくることにしたのです。残念ながら石巻では仕事が見つからず、生活拠点を仙台に移したのが2010年の８月のことでした。そして、新しい生活を始めたときに東日本大震災を経験したわけです。

震災直後、学校などでボランティア活動をする機会がありまして、私自身は当時自分に子どももおりませんし、子どもたちと接する機会がほとんどないような生活でしたが、その学校で子どもたちを見ているとあることに気が付きました。笑うのを我慢しているように見えたり、あるいは感情を表現することを遠慮しているように感じたりすることが多くあったのです。震災の後ですから、社会が大混乱していて大人たちは右往左往していますし、そういう状況を子どもたちは理解して、迷惑をかけないよう

に我慢しているのだなと思いました。先生方に伺いますと、夏休みが明けたら一層無口になったとか、以前は悪ふざけをすることもあったけれども全くしなくなったとか、そういうお話も聞きました。みんな我慢しているのだと思いました。一時的には仕方のないことかもしれませんが、こういう状況は長期化すると子どもたちの心にトラウマになってしまうのではないかと心配になりました。そして、家庭と学校以外の場所で子どもたちが自由に気持ちを表現することが必要なのではないか、そういう機会と場所を作ることができないかということを考え始めました。

こちらの写真をご覧ください。これは2012年の10月、石巻の雄勝小学校で開催されたイベントをお手伝いしたときに撮った写真です。雄勝といえばすずりにもなるスレート状の雄勝石が有名ですが、その雄勝石にカラフルな絵を描くワークショップが開催されました。無邪気な子どもたちの笑い声が響く中、気の置けない集まりだったのですが、よく見ると隅のほうに静かな男の子が二人いまして、小学校の高学年くらいの男の子だったと思います。その手元を覗き込んで私は思わず息をのみました。赤い絵の具で死という字を何度も何度も無言で書いていたからです。余りのことに、どうしたのと尋ねることもできないような状況でした。一体どんな光景を目にして、どんな体験をしたのかなと思い量るしかありませんでした。

人間は、経験や知識を自分の中で消化して外に出す、そして発信するということを繰り返して成長していくと思います。インプットしただけで自分の中で消化が出来ず、アウトプットできない状態は、人間の体でいえば消化不良のようなことだと思うのですが、体験や経験を消化できないということは、その体験や経験が体の中で心の中で行き場をなくして体の中に残り、場合によっては毒のように広がって自らをむしばんでいく。それがトラウマではないかと私は思うのですが、東日本大震災のような誰も経験したことのないような大きなことは、下手をするとどんどんトラウマになって子どもたちの心の中に残ってしまうのかな、でも、この誰も経験したことがない経験を何とか生きる力に変える方法はないだろうかというようなことを考え始めました。

そもそも、生きる力とは何でしょうか。私はつくる力、伝える力、つながる力、この３つではないかと思っています。つくる力は、つまり表現する力。伝える力はコミュニケーション力。つながる力は行動力です。自分の中にインプットされた経験や知識を自分の中で消化して、そしてそれを表現し、伝え、行動する。そうすれば人は経験や知識を生きる力に変えていけるのではないかと考えました。

このことを実践するために、まず子どもたちが表現する機会、場所をつくろうと考えまして、アートやプログラミングのワークショップなどを開催し始めました。そうこうしているうちに、地域の外の皆さんから石巻の子どもたちはどうしているのですか、どういう支援が求められているのでしょうかということをたくさん聞かれるようになってきました。

そこで、子どもたちが表現したものを伝えようと思いました。もっと言えば、表現のテーマを情報発信として、自分たちの言葉で自分たちの現状を伝える取組にしてはどうかと思いました。伝えるためにはメディアが必要になってきます。メディアといえば新聞と単純に思い立ちまして、企画書を作って地元の石巻日日新聞社の門をたたきました。

石巻日日新聞は、大正元年の1912年創刊の石巻地方で発行されている夕刊紙です。この朝ではなくて夕方届く薄い新聞には子どもの頃から愛着がありました。石巻日日新聞のミッションは「愛する地域を未来の笑顔につなげます」ということなのですが、非常に私は共感できることでした。また、当時、輪転機が壊れて印刷ができなかったため、６日間手書きで壁新聞をつくっていたことが話題になっていました。新聞社でありながらそういう型破りな発想があるところであれば分かっていただけるのではないかと考えまして、御協力のお願いに行ったわけです。結果、非常によく理解していただきまして、今ではまるで社内の一つのプロジェクトであるかのように皆さんに御協力いただいています。仕様はブランケット版という普通の新聞と同じ大きさでカラーにしていただきまして、４ページです。子どもたちの発想をいろいろ取り入れて、写真も大きく使い、大人の新聞とはまた違った自由な新聞づくりを目指してきました。

石巻日日新聞社の近江社長は当団体の理事にもなっていただいているのですが、最初は一般社団法人キッズ・メディア・ステーションという名前で立

ち上げました。2011年12月１日です。昨年の12月に公益社団法人として宮城県から認めていただきましたので、その機会に名前をこどもみらい研究所と変えました。ミッションは、設立当初の思いを踏襲し、「子どもたちがつくる力、伝える力、つながる力を磨き、変化の激しい現代社会を生き抜く力を身につけるための機会を創出、支援すること」としています。

子どもたちのメディアができましたので、あとは表現したものを文字にして発信していくばかりです。震災を経験した子どもたちは大人が大変そうな状況にあると、自分たちも何かの役に立ちたいとそういう積極性を発揮して、取材して発信することを喜々として行うようになりました。そして、国内だけではなく海外にも読者を持つメディアになってきました。今、発行部数は３万部です。子どもが作る新聞でこれほど多くの地域に読者がある新聞は、ほかにはないと今では自負しています。

そして、この７年間の取材活動で見えてきたことが三つあります。一つ目は、全ての子どもは生まれながらのジャーナリストであるということです。私は、ジャーナリストというのは好奇心と相手の心を開く力を持つ存在でないといい取材ができないと思っているのですが、それはもう無条件に子どもたちが持っている能力なのです。子どもが取材に来ると間違いなく大人の皆さんは心を開いて、いろいろな話をしてくださいます。あるとき石巻日日新聞の記者の方と同じ人を取材に行ったところ、最初にその日日新聞の方が取材をして、その後子どもの記者が取材をするという順番だったのですが、終わった後に日日新聞社の記者の方が、「すごいな、僕には聞けない話をいっぱい聞いていたね」と褒めてくださったのです。私は取材に行く先々でこういう場面をたくさん目にしてきました。これは、なぜか大人同士だと壁ができてしまって本当のところが聞けなかったりするのですが、大人というのは相手が子どもだと伝えたいという本能のようなものがどんどんどんどん出てくるみたいです。私はそういう意味では子どもたちと一緒にたくさんの方のいいお話を聞く機会に恵まれたなと子どもたちに感謝しています。

次に、取材ですけれども、取材は未来を開く扉だと思っています。取材ならどこにでも誰にでも会いに行けます。過去には、本田圭佑選手にお手紙を書いて返事をもらった記者もいますし、つい最近も女川町のサンマの収穫祭というのが９月30日にありまして、女川町出身の中村雅俊さんがゲストとしていらしていたのですが、中村さんは大人のメディアの取材は受けなかったのに、子どもの記者の取材は30分も受けてくださいました。これは、次の号で記事として御紹介したいと思っていますので、ぜひ楽しみにしていただきたいと思います。

そして、三つ目に地域の魅力を再発見する機会になるということです。これは、東日本大震災で私たちが気付いた大きな気付きの一つだと思いますが、日常にこそ価値があるということを東日本大震災の後に多くの人が感じたと思います。これは日々の取材活動により子どもたちがいろいろ当たり前だと思っていたけれども、これは誰かの仕事の上に成り立っているということを知ったりですとか、あるいは石巻地域にはこういういいところがあったのに知らなかった、今回取材をして初めて気が付いたりというようなことを言ってくれることも多々あります。

そして、先ほどお話ししましたとおり石巻はつまらないところだと私は思っていたのですが、それは間違っていたと、この場でも認めさせていただきたいと思います。知らなかっただけです。実際、子どもたちは家庭と学校の行き来が主な日常の行動パターンなので、学校と家庭の往復だけではなかなか社会を知る機会にはならないと思います。それは、私が子どもの頃から感じていたことでもありまして、ですからこの活動を通してできるだけ子どもたちが社会を見て知る機会にもしていきたいと思っています。

私が今日、皆さんにぜひお伝えしたいと思っていることは、世界を広げようということです。今日のテーマは子どもの虐待防止ですけれども、小さな世界の中にいるとその世界の価値基準だけに自分を当てはめなければいけなくなってしまいます。実は世の中には多様な価値観と、そして多様な活動があるわけで、もしかするとその外の世界に自分の適性があるかもしれないということをなかなか子どもだけでは認識することができません。知らないことを知るということで自分の適性が見つかり、自分の得意なこと、好きなことが分かれば目標を設定することができます。目標ができればモチベーションも上がっていきます。

石巻日日こども新聞の制作の過程で行っている取材活動、これは単に取材ではありません。この取材活動を通して、できるだけ多くの子どもたちが未来の夢を見つけるための活動にしていきたいなと思っています。これは東日本大震災が起きてから始まった活動でありまして、試行錯誤しながら７年間発行を続けてきています。できるだけ多くの子どもたちに参加してほしいと思っていますので、参加する子どもたちは参加費を負担しません。これは読者が寄附という形で子どもたちの経験を応援する仕組みとして続けています。

今日は、先ほども申しましたとおり子どもの虐待防止推進全国フォーラムですが、虐待される環境にある子どもたちが何とか外に出てきてくれるような仕組みがもっとできていかないかなと思っています。今、この子ども新聞の活動に参加している子どもたちは、やはり保護者の方が送迎をしてワークショップに来てくれたり、取材のときにもいろいろフォローしてくれたりですとか、家族の方の協力が非常に大きいです。家に帰ってから一緒に保護者の方と記事を作成するなど、そういうところも皆さん熱心に協力してくださる方が多いですが、私としてはできればもっともっと、なかなかそういうことができる環境にない子どもたちが外に出てきてくれて、そういう人たちと一緒にこうした活動ができたらいいなと思っています。出てきてさえくれれば世界は無限に広がっていくし、自分の可能性を自分で開くこともできるし、そして背中を押してくれる大人たちがたくさんいるということを何とか伝えたいなと思っています。

子どもたちと保護者には経済的な負担をかけないで取り組んでいけるようにしていますけれども、ただ私たちだけではとても小さな力にしかなりません。先ほどTEDICの門馬さんからもお話がありましたけれども、石巻だけでもいろいろな人たちが子どもたちにいろいろな活動を提供していますが、この個々の小さな取組が乗っていけるプラットフォームのようなものがどんどんできていくといいのではないかなと最近感じるところもあります。

以上、活動の御紹介と課題の共有をさせていただきました。御清聴ありがとうございました。

**加藤氏**　ありがとうございました。

それでは、パネリストの方には前にお座りいただいて議論、討論を始めてまいりたいと思います。

最初に、何か御自分の発表の中で少し時間が足りなかったとか補足したいということがございましたらどうぞ。

**工藤氏**　はい。学校訪問等で話合いを行っていると、その中でやはり不登校に関することが多いのですが、虐待に関しても話合いをすることがあります。

例えば、子どもには登校する意思があるのに保護者が登校させないとか、妨害するケースとか、ネグレクトの状況により登校の意欲が失われて不登校になってしまう場合もあるというような話合いになることもあります。

子どもが登校を嫌がっているのではなくて、保護者が登校させないのではないかというような疑いを持つことも必要であるなど、そういうところを再認識する場ともなっています。

学校は、やはり子どもの安全確認を行うことが大事な責務なので、子どもの虐待の早期発見、早期対応と子どもの虐待防止には寄与しなければならない。虐待を受けた子どもたちの自立支援についても適切な対応を含め、学校での話合いは有意義になっていると言うことができるのではないかと思います。

以上です。

**加藤氏**　不登校としてひとまとめにしてしまえない、そこに隠れた要支援、要保護家庭の実情もあるかもしれないという目を持って見ていくことが必要というお話でした。

阿部さん、いかがでしょうか。

**阿部氏**　門馬さんのほうから、どんなことがあっても自分の人生を生きていくのだとお子さんに思ってもらえるようにといいますか、思うことが大切だというお話がありました。私たちも親を亡くした子どもたちと関わる中で、最終的には親を亡くしたことは悲しかったけれども、悲しいこと、つらいことがあってももう一度その経験に折り合いをつけて生きていくということを最後のメッセージといいますか、そうしたことが伝わることを目標にやっています。なので、やはりどんな経験をしても周りのサポートというものが全ての子どもに共通して必要なこ

となのかなと今日お話をお伺いして感じました。

**加藤氏**　どのような経験をした子どもたちにとっても大事なことというものに気付かれたということで、大変今後の議論にとって有益だと思います。

では、門馬さん、いかがでしょう。

**門馬氏**　虐待をどう防止するのかというところの話になりますが、おそらくどう防ぐのかという、「防ぐ」という視点だけでは、限界があるのかもしれないと思っています。虐待をやってはいけない、「やっちゃいかん」ということは分かっているわけです。どうして虐待をしてしまうのかというところにやはり踏み込んでいかなければ、状況は変わっていかないと思います。

「どうしてやってしまうのか」というところに踏み込んでいくときに、今日のお話というのはすごくヒントになる部分があったと思うのです。子どもや若者、保護者に限らず、私たちもそうですが、思わず「実はさあ」、と話してしまうのは、設定された面接やカウンセリングの場でなかったりするのです。何気なく一緒にサッカーボール蹴っている間に、石巻日日子ども新聞さんのような活動の場で、一緒に買い物をしているときに、そんな何気ない活動の場面で語ってくれたりするわけです。この人だったらちょっと話してもいいかもとか、思わず言っちゃったとか、そういうことがきっとあるのだろうと思っています。

**加藤氏**　子どもが、この人になら話してもいい、この場なら話してもいいと選ぶ。そして、聞いた人はそれを一人で抱えるのではなくみんなで対応していくという言葉をいただきました。

それでは、お願いいたします。

**太田氏**　先ほども申しましたが、私自身には子どもがいないのですが、私の周りを見回してもやはり同じように子どもがいない大人だったり、あるいは子育てが終わった世代だったり、経済的にゆとりがあって子どもたちに関わる時間があるといった人がたくさんいます。

虐待の問題というのは、閉ざされた狭い環境の中で起きていることが多いと思いますが、その外に子どもたちの背中を押してくれる大人たちがいるということを何とか子どもたちにも、それから問題を抱えている人たちにも伝えたり、それから、実際に子育てに関わっていないけど関わりたいという気持ちのある大人がそこに関わっていけるというような機会を提供していったりということができたら、もっと大きな力になるのではないかと日頃感じています。

**加藤氏**　ありがとうございました。

それぞれのパネリストの方々から被災地発信の子どもの状況の報告の後、この一巡のコメントの中で随分と、今回の子どもの虐待防止推進全国フォーラムという点での見方を補足していただいたように思います。

それではフロアの方々と討議をしてまいりたいと思うのですが、皆さんの中からコメント、あるいは御質問がありましたらお願いいたします。その際、差し支えのない範囲で御所属と、どのパネリストの方に御意見を伺いたいのか、４人ともに全員にお答えくださいということであればそのようにお話しいただいてからコメントを頂戴したいと思います。なかなか口火を切るというのは勇気がいるところかと思いますが、いかがですか。

**分科会参加者①**　こんにちは。今日は私が知らない分野のことを教えていただくよい時間をいただき、ありがとうございました。

私は今、児童相談所に勤務しています。ふだん、児童相談所ではとても悲しい目に遭っていたり、困っていたりと、子どもたちの辛そうな面を中心に聞きます。けれども、今日の皆さんのお話を聞くと、それだけではなくて子どものもっと力強いところ、いいところ、そういったものがもっとあるのだろうなと感じました。本当はそうだったはずなのに、私自身がちょっと偏った意識に入り始めていることに気付きました。

そこで、よろしければ、皆様のもとに来ているお子様たちの元気な、良い、力強い姿というのをもう一度教えていただけたらと思います。そこがきっと、虐待リスクがあるなど困っている御家庭から一歩踏み出すときの子どもたちへのとっかかりとして、何かヒントになるのではないかと思います。よろしくお願いいたします。

**加藤氏**　では、４人のパネリストの方々に次々にお答えいただくということでよろしいですね。子どもたちの力強い姿、御自分で見ていて感じるものがあれば、ぜひ教えていただきたいというところです。太田さんは、そういった面をたくさんご覧になっていらっしゃるかなと思います。

**太田氏**　子どもがすごくて、私のほうが教えてもらったりとか、大人がみんなたじろいでしまうことが結構あるので、いろいろなお話があると思いますが、まず、今思い出したことは、震災の直後にがれき処理場の取材にみんなで行ったことがありました。そのときは、ジョイントベンチャーの方とゼネコンさんと、それから宮城県の担当者の方が前に３人並んで、子どもたちに質問してくださいという、今の私たちと皆さんみたいな位置関係でした。子どもたちがこう並んでいて、次々に質問していくのですけれども、当時小学校１年生だった女の子が、どうしてこの仕事をしているのですかと聞きました。そうしましたら三人三様にすごく長く説明してくださいました。私は少し遠くから見ていて、ちゃんと理解してるいかなと心配になったのですが、後でその小学校１年生の女の子のメモ用紙をのぞいて私は笑ってしまいました。三人のうちの二人の方は辞令が下りて、命令があったので今この仕事に就いていますという主旨のお話でした。もう一人の方は、自分から希望してこの仕事に就きましたという主旨のお話でした。そうしましたら、彼女のメモ帳には、１、２、３と書いてありまして、１、２に矢印が引いてあって、「やれと言われたからやっている」、３は「自分で手を挙げた」。それだけ書いてありました。私はすばらしいと思いまして、こんなに長く大人が説明したけれども、話の主旨はしっかり子どもは聞いているのです。それを後でお話ししてくださった皆さんにお伝しましたら、皆さん、「いやあ、恥ずかしいなあ」とおっしゃって、子どもたちに何とか分かってほしいと思ったけれども、やっぱりそういうことですね、と笑ってくださいました。面白かったですけれども、反省させられた出来事でもありました。

**加藤氏**　ありがとうございます。では、門馬さんもいかがでしょうか。

**門馬氏**　一度、フリースクールを利用してくれている子どもにスタッフ向けにレクチャーをお願いしたことがありました。なぜお願いしたかというと、最近の子ども、若者がどういったものにはまっているのかよく分からないという話にスタッフの間でなり、考えた結果出たアイディアが、子どもに教えてもらったらいいのではないかということでした。フリースクールの時間を使って、不登校の高校２年生の男の子がホワイトボードでレクチャーをしてくれました。終わった後にその子に感想を聞いたら、「みんなすごいとか言ってたんですけど、僕にとっては全然すごいことじゃないんです。でも皆さんすごいって思うんですね」って言っていました。そんな出来事がありましたので御紹介しました。

**加藤氏**　ありがとうございます。では、阿部さんもどうぞ。

**阿部氏**　はい。まず親を亡くした子どもと言われると、どうしても気分が沈んでいるのではないかとか荒れているのではないかといったイメージを持たれることが多くて、実際に私たちの活動に賛同してくださるボランティアの方々も最初は「どんなふうに関わったらいいんですか」、「何をしゃべるんですか」みたいな、そういうイメージを持たれるのですが、やはり実際は普通と言ってしまったら言葉が違うかもしれませんが、とっても元気です。常に走り回っています。常に笑っています。大人のほうがついていくのが大変です。大人のほうが休憩が必要というくらい毎日毎日走り回っています。

　ただ、やはり人生生きていく上で親を亡くしたという経験がところどころで傷となっていたり、振り返るときにちょっと痛みを感じたりということはあ

るのですが、基本的にはとっても元気に過ごしています。

あとは、大切な人について、僕は何年生のときにお父さんを亡くしましたとか、私は小学校１年生のときにお母さんを亡くしましたと、今はこういうふうに思っていますというような話合いをする時間があるのですが、その前まではああだこうだといろいろな話をしたり、誰が話していようがほかの子たちも話をしたりとかするのですが、私は誰を亡くしましたという話が始まると、ぴたっと自分の話をしないで人の話に耳を傾ける。そうした聞く力があったりとか、人を思いやる力があったりというのは、元気な力強い場面といったらまた違うかもしれないですが、子どもの力強い場面、姿というのはそうしたところもあるのかなと思いました。

**加藤氏**　はい、ありがとうございます。それでは、工藤さんはいかがでしょうか。

**工藤氏**　子どものよいところ、力強いところというお話だったのですが、学校訪問とか学校の先生方のお話を聞くと、やはり今の子どもたちはなかなか自己肯定感、自尊感情が持てない。自分には本当はもっといいところとか力強いところがあるけど、自信がなくてそれに気付かない子がいるようです。いいところが自分にあるということは、何かの経験を通しながら身に付くといいと思うのですが、そうした経験がやはり少ないという現状があります。御存じのように外国と比べても、日本人の子どもは自己肯定感が低いというような調査もございます。

自分にはよいところがあるとか力強いところがあるということをもっともっと子どもたちに意識させる教育が必要じゃないか、それが実は不登校の未然防止にも結びつくのではないかという取組が現在、東松島市で行われています。

文部科学省の指定で今年から２年間、東松島市の矢本一中、矢本二中、鳴瀬未来中学校の３中学校区で「魅力ある学校づくり調査研究事業」に取り組んでおります。中身は不登校の未然防止です。不登校を未然防止するためには、子どもたちが、自尊感情を高めたり、自己肯定感を高めたりして、自分にはもっといいところがあるということを学校の教育活動を通しながら高めていき、学校生活や活動が面白くなるような、そんな学校づくりに取り組んでいるところです。

子どもたちが自分のよいところや力強いところが自分にはあるという自信を持つことが、これから生きていく力の大事なところになるのではないかと思います。

以上です。

**加藤氏**　ありがとうございます。ほかの方でいかがでしょうか。

**分科会参加者②**　お話を聞かせていただいて、すごく勉強になりました。ありがとうございます。

私は今、大学生で教職の勉強をしています。このフォーラムも授業の中で先生に紹介されてきたのですが、お話の中で、様々な分野から子どもたちが抱えるいろいろな課題についてのサポートや寄り添い方について、知ることができました。

その子どもたちの抱える問題は、一つの問題のように見えていろいろな問題が絡み合いながら起こってくるというのを知ることができました。その中で課題解決に向けていろいろな分野の方々の連携が必要になってくると思うのですが、その連携の中で同じ目標に向かって解決する上で、学校や教師に求めること、こうあったらいいなというようなことを教えていただきたいなと思います。

**加藤氏**　大変大きな、重要な問題です。問題解決を図っていくときに、いろいろな機関と連携をしていくことになるけれども、学校や教師に向けて必要なことということでよろしいですか。

**分科会参加者②**　同じ目標に向かって活動するときに、教師とか学校に、やはり家庭と学校は子どもが多く行き来する場所の一つでもあるので、そこに求められるようなものや、もっとこうして子どもたちに寄り添っていけばいいよといったアドバイスをいただきたいです。

**加藤氏**　ありがとうございます。未来の先生がこういう御質問をしてくださっています。では、工藤さんからよろしいでしょうか。

**工藤氏**　今質問された学生さん、大変すばらしいですね。将来、教師になる前にいろいろな勉強として、学校以外のところにいっぱい行ってみて勉強するということは大変いいことだと思います。

教師に求めるものということですが、なかなか学校だけではいろいろな問題は解決できません。「チーム学校」という言葉がよく使われているのですが、チーム学校というのは学校組織の中だけでチームを組むのではないということです。いろいろな人たち、周りの関係機関とタッグを組んで一つの学校としてやっていくという意味でもこれからも、重要な部分ではないかと思います。

今回、不登校を取り上げましたけれども、その中でサポート班の話が出てきました。学校には先生方、あとカウンセラーの方もいると思うのですが、様々な問題にはなかなか学校だけで対処するのは難しいということで、事務所にサポート班ができています。３職種と言いましたけれども、臨床心理士の方、社会福祉士の方、そして教育関係の指導主事と、そういう専門家が一つのグループを組んでワンストップ型、またアウトリーチということで自由に行動でき、家庭に行ったりいろいろな場所に行ったり、そういう部門を設けることによって学校をサポートしています。

では、学校の先生方に何を求めるのかということですけれども、常日頃からそういうものが外部にあるので、学校だけで抱え込まないということです。もちろん、クラスでいろいろな問題があると思いますが、それを先生が一人で抱え込まないで必ず学年主任や教頭先生、校長先生、また生徒指導の担当の先生に相談し、組織で対応することが大切です。学校で対処できない場合には関係機関などに支援を求めていくことも大切です。

また、何か問題が起きたときだけに求めるのではなくて、日頃から関係機関とつながりを持つ。だから、学生さんもこの場所で学ばれることはやはり学校だけではなくていろいろな関係機関があって、問題が起きたときは常にネットワークで対応していくというところを学んでいただければいいのかなと思います。少し話がずれた面もありますが、以上です。

**加藤氏**　あしなが育英会の活動の中では学校に求めることはありますか。

**阿部氏**　いえ、特にそうした活動はしてはいないのですが、今石巻市と東松島市、登米市あたりから養護教諭の先生方が自主的な勉強会でレインボーハウスに来てくださっていますが、その話を聞かせていただくと、やはり保健室というのは傷を手当するだけではなくて心のケアをする場所でもあるということが、震災以降より先生方が感じられているようでした。ただ、学校の中で解決できればいいのですが、先生方もいろいろなお仕事を抱えていらっしゃって、難しいことも当然だと思うのですが、そうしたときにやはり、先ほどおっしゃっていたように学校だけでどうにかしようという考えになるのではなく、外部、ほかのところと一緒に連携する、風通しをよくして子どもたちを全体的に見守っていくという視点、そうしたものがどんどん出てきていると聞いて、すごくすばらしいなと、こうしたことが根づいていくといいなと思いました。

**加藤氏**　門馬さんの活動は非常に幅が広いので、何かありましたら教えてください。

**門馬氏**　こうした分野の話では、学校連携の話に必ずなりますが、まずは教育と福祉の接続の部分が学校でも求められてきているということはまず知っていただきたいと思います。

また別の視点になりますが、学校の先生方は子どもたちのことを本当に思って、必死になって、時間をかけて、情熱をかけて、様々な校務分掌に追われながらも、対応されているのだと強く感じています。一方で、学校に対する地域、社会のまなざしは、年々冷たくなっているように思います。子どもたちを中心に考えたときに、子どもをどう支えるのかという視点は大事です。その子どもの家族をどう支えるのかというのもまた大事です。その子ども、家族が暮らしていく地域をどう支えていくのかという視点も大事です。子ども、学校、そして地域にある学校をどう支えていくのかという視点もまた大事です。更に言えば、更に外にいる様々な支援機関や支援者といった、子ども、家族、地域、学校に関わる人たちをどう支えていくのかという社会のまなざしも変わっていかなければ、この状況は変わらないのではと強く思います。

あとは、子どもを支援者が取り合わないというこ

とはすごく大切だと思っています。「これはうちのケース」とか、「これは私が見ているから」とかですね。これは支援者の思いが強いがゆえに陥りがちです。そのような感覚になると、「あの機関は全然動いてくれない」などということになっていきがちだと思います。「私が抱えている子ども」という視点で語ってしまう危険性です。そこを乗り越えなければ、お互いがお互いをしんどくしてしまう。子どもは支援者にひもづくのではなくて子どもは子どもなのです。そこをしっかり真ん中に置いた上でどう捉えることができるのか。

**加藤氏**　では、太田さんお願いします。

**太田氏**　ぜひ、子どもたちに聞いてみてはどうかと思うのですが、私たちのところに４月からボランティアに来てくれている宮城教育大学４年生の女子学生がいまして、このたび無事に教員採用試験に受かり、４月から先生になりますとこの間発表したら、「ええっ」となりました。仮にMちゃんとしますけれども、「Mちゃんは４月から先生になっちゃうのね。じゃあ、今のうちに教えてあげる。あのね、こういう先生は嫌われるから」って子どもたちが饒舌に語り始めました。「話が長い先生はだめ」とか言うのです。「４月になったらもう教えてあげられないから今のうちに教えてあげる」って張り切って子どもが教えてくれました。ぜひ、子どもたちに聞いてみたらいいのではじゃないかなと思います。

**加藤氏**　ありがとうございます。幾つかのキーワードが出てきたと思います。風通しよく、全体的に、そして日頃からつながりを持ちましょう。教育と福祉の接続は特に必要です。そして、子どもを真ん中に置いて子どもに聞いてみる、当事者という子どもを除外しない、取り合わない、そこが中心であるというような４人の方々からのお話、とてもすばらしいと思い、つながってきたなという感じがあります。

もう一つくらい、お聞きできるかと思いますが、どうぞ。

**分科会参加者③**　今日はありがとうございました。海を跨いで、北海道から参りました。

特に、門馬さんと阿部さんにお聞きしたいのですが、お二人とも自分の人生を子どもたちが歩むということに大変価値があり、大切にしなくてはいけないとおっしゃっていて、まさにそのとおりだと思いました。一方で、例えばアウトリーチという取組は、ややもすると落下傘のように子どもたちの支援という形でやってきて、意思に反するとまでは言わないけれども、突然やってきた支援はある意味大人主導での支援であって、それを子ども自身が自分のために使う支援、つまり支援というものは与えられるものではなくて利用していくものだと私自身は思っているのですが、そこに転換していくようなポイントだとか、そのきっかけだとか、そうしたものをお二人にお話ししていただければと思います。

**加藤氏**　大変大きなまとめになる質問をいただきました。大人主導の支援から子どもが自分で利用していける支援になる、その転換点には何があるか。よろしくお願いします。

**阿部氏**　そうですね、今レインボーハウスに来ている子どもたちは小学生ですので、やはり自分が来たいと言っても親が連れてくるので、大人主導かもしれません。あしなが育英会では、仙台で虹カフェといって18歳以上の子どもたちの居場所づくりといった活動もしています。その中には、子どもの頃レインボーハウスに来ていたけれども、そこの雰囲気は何となくそのときは嫌で、お話なんかしたくないし、何か悲しい、いい話とかも別にしたくないしということで遠ざかったけれども、18歳になってまたつながって、「なんだ、こういうことをしているのね、今なら話せるかもしれない」と感じて、そこは自分自身で決めて来てくれる、そういった転換、ポイントというのでしょうか。そうした活動はしていて、そのようなことがあります。

**加藤氏**　はい。門馬さん、いかがでしょう。

**門馬氏**　とても難しい指摘ですね。私自身が支援の現場などですごく考えていること、子どもたちと関わる中ですごく感じているものは、支援者、被支援者の壁をどう乗り越えるかということです。支えられる人と支える人、もしかしたら生産者と消費者みたいな言い方にもなるのかもしれませんが、そこに

明確に線を引いた前提で関わるということはマインドとしては持たないようにしています。

私自身も困っていることがたくさんあるし、私自身も私の人生を生きていて、彼は彼の人生を生きていて。私は確かに少し先に生まれて、今こういう仕事をしているかもしれないけれども、20年、30年経ったらその立場は逆転しているかもしれないし、20年、30年経たなかったとしても、ふとした場面で僕はその子に支えられる場面もあるわけで、どう向き合うかといったマインドのところでは、そうした部分を大切にしています。

支援の実務の中で「声なき声」とどう向き合うのかという点は、大切な部分だと思います。「君は僕に会ったほうがいいんだ」というような話ではなく、「僕は君に会いたかったし会えたら嬉しいなと思うし、会えたら一緒に何かできるかなと思うんだけれどもどう」というようなことを、一緒に確認しながら、呼吸を合わせていきながらやっていきたいと。

実務の中ではやはり御家族や関係者の困り感の中で関わっていく支援というものもあるとは思います。それはそれで必要な局面もあると思いますが、そうだとしても、当事者の彼らからすると会う必要がなかったりするわけです。「何でお前急に来たんだよ」というような、そういったことを前提で僕たちが彼らにどう声を掛けるのか、振る舞うのかというのは大切だと思っています。「お母さんから依頼があって君を何とかしないといけないから来たよ」と言うのか、「いやごめんね」と言えるのか、「会ってくれてありがとう」と言えるのか。そういうことが大切なんじゃないかと思っています。

**加藤氏**　ありがとうございました。

今の最後の御質問を伺いながら、阿部さんがおっしゃったところで、後になって「あのときはちょっと嫌だったけれど、あ、あの支援ってこういうことだったのか」と分かったというお話がありましたよね。お聞きしながら、太田さんがおっしゃった「石巻はあんなに嫌いだった、でも人生体験の中でいつの間にか石巻に戻っていっている」という話につながりました。そのときは分からなかったことが、いろいろな世界と触れることで、まさに世界を広げてもらうことでだんだん分かってくるものがあったり、自分の身に染みてくるものがあったり、そして積極的に自分で使っていけるようになっていくという部分があるのかな、そうだとすると、支援は続けていかなくてはいけないなと。後で戻ってきてもらえる場所を、待っていてあげる誰かが必要だなと思いました。門馬さんが最後におっしゃって下さった、こちら側がどんな姿勢で待っているかも重要ですね。大変いい質問をいただきました。最後のまとめとさせていただきたいと思います。

まだまだお声をいただきたいところですけれども、今日は時間ですのでここまでにしたいと思います。いろいろ御協力ありがとうございました。そして、パネリストの方々、御発表いただきましたことにフロアの皆さんで拍手で終わりたいと思います。ありがとうございました。